校異源氏物語・花のえん

きさらきのはつかあまり南殿のさくらの宴せさせ給后春宮の御つほね左右にしてまうのほりたまふ弘徽殿の女御中宮のかくておはするを折ふしことにやすからすおほせとものみにはえすくし給はてまいり給日いとよくはれて空のけしき鳥のこゑも心ちよけなるにみこたちかむたちめよりはしめてその道のはみなたむゐむ給はりてふみつくり給ふ宰相中将春といふもし給はれりとの給ふこゑさへれいの人にことなりつきに頭中将人のめうつしもたゝならすおほゆへかめれといとめやすくもてしつめてこはつかひなともの　くしくすくれたりさての人　くはみなをくしかちにはなしろめるおほかり地下の人はましてみかと春宮の御さえかしこくすくれておはしますかゝるかたにやむことなき人おほくものし給ふころなるにはつかしくはる　くとくもりなきにはにたちいつるほとはしたなくてやすき事なれとくるしけなりとしおいたるはかせとものなりあやしくやつれてれいなれたるもあはれにさま　く御らんするなむおかしかりけるかくともなとはさらにもいはすととのへさせ給へりやう　く入日になるほと春の鴬さへつるといふまひいとおもしろくみゆるに源氏の御もみちの賀のおりおほしいてられて春宮かさしたまはせてせちにせめのたまはするにのかれかたくてたちてのとかにそてかへすところをひとをれけしきはかりまひ給へるにるへきものなくみゆ左のおとゝうらめしさもわすれて涙をとし給ふ頭中将いつらおそしとあれは柳花園といふまひをこれはいますこしすくしてかゝる事もやと心つかひやしけむいとおもしろけれは御そ給はりていとめつらしき事に人をもへりかむたちめみなみたれてまひ給へと夜に入てはことにけちめもみえすふみなとかうするにも源氏の君の御をはかうしもえよみやらすくことにすしのゝしるはかせともの心にもいみしうおもへりかうやうのおりにもまつこの君をひかりにしたまへれはみかともいかてかをろかにおほされん中宮御めのとまるにつけて春宮の女御のあなかちににくみ給らむもあやしうわかかうおもふも心うしとそみつからおほしかへされける

　おほかたに花のすかたをみましかは露も心のおかれましやは御心のうちなりけんこといかてもりにけむ夜いたうふけてなむことはてける上達部をのをの

あかれ后春宮かへらせ給ひぬれはのとやかになりぬるに月いとあかうさしいてゝおかしきを源氏の君ゑい心ちにみすくしかたくおほえ給ひけれはうへの人

くもうちやすみてかやうに思ひかけぬほとにもしさりぬへきひまもやあるとふちつほわたりをわりなふしのひてうかゝひありけとかたらふへきとくちもさしてけれはうちなけきてなをあらしに弘徽殿のほそとのにたちより給へれは三のくちあきたり女御はうへの御つほねにやかてまうのほり給にけれは人すくなゝるけはひなりおくのくるゝともあきて人をともせすかやうにて世中のあやまちはするそかしと思ひてやをらのほりてのそき給人はみなねたるへしいとわかうおかしけなるこゑのなへての人とはきこえぬおほろ月夜ににるものそなきとうちすしてこなたさまにはくるものかいとうれしくてふと袖をとらへたまふ女おそろしと思へるけしきにてあなむくつけこはたそとの給へとなにかうとましきとて

ふかき夜のあはれをしるも入月のおほろけならぬ契とそおもふとてやをらいたきおろしてとはをしたてつあさましきにあきれたるさまいとなつかしうおかしけなりわなゝく　くこゝに人とのたまへとまろはみな人にゆるされたれはめしよせたりともなむてう事かあらんたゝしのひてこそとの給ふこゑにこのきみなりけりときゝさためていささかなくさめけりわひしとおもへるものからなさけなくこわ　くしうはみえしとおもへりゑい心ちやれいならさりけむゆるさん事はくちおしきに女もわかうたをやきてつよき心もしらぬなるへしらうたしとみ給ふにほとなくあけゆけは心あはたゝし女はましてさま　くにおもひみたれたるけしきなり猶なのりしたまへいかてきこゆへきかうてやみなむとはさりともおほされしとの給へは

うき身世にやかてきえなはたつねても草のはらをはとはしとやおもふといふさまえむになまめきたりことはりやきこえたかへたるもしかなとて

いつれそと露のやとりをわかむまにこさゝかはらにかせもこそふけわつらはしくおほす事ならすはなにかつゝまむもしすかい給ふかともいひあへす人

くおきさはきうへの御つほねにまひりちかふけしきともしけくまよへはいとはりなくてあふきはかりをしるしにとりかへていて給ひぬきりつほには人　くおほくさふらひておとろきたるもあれはかゝるをさもたゆみなき御しのひありきかなとつきしろひつゝそらねをそしあへるいり給ひてふし給へれとねいられすおかしかりつる人のさまかな女御の御おとうとたちにこそはあらめまた世になれぬは五六の君ならんかしそちの宮の北の方頭中将のすさめぬ四の君なとこ

そよしときゝしかなか　くそれならましかはいますこしおかしからまし六は春
宮にたてまつらんと心さし給へるをいとおしうもあるへいかなわつらはしうた
つねむ程もまきらはしさてたえなむとはおもはぬけしきなりつるをいかなれは
ことかよはすへきさまをゝしへすなりぬらんなとよろつにおもふも心のとまる
なるへしかうやうなるにつけてもまつかのわたりのありさまのこよなうおくま
りたるはやとありかたふおもひくらへられ給ふその日は後宴の事ありてまきれ
くらしたまひつさうのことつかうまつり給きのふの事よりもなまめかしうおも
しろしふちつほはあかつきにまうのほり給にけりかのありあけいてやしぬらん
と心も空にておもひいたらぬくまなきよしきよこれみつをつけてうかゝはせ給
けれはおまへよりまかて給ひけるほとにたゝいま北のちんよりかねてよりかく
れたちて侍つる車ともまかりいつる御かた　くのさと人侍へる中に四位の少将
右中弁なといそきいててをくりし侍へるや弘徽殿の御あかれならんとみ給へつ
るけしうはあらぬけはひともしるくてくるまみつはかり侍つときこゆるにもむ
ねうちつふれ給ふいかにしていつれとしらむちゝおとゝなときゝてこと　くし
うもてなさんもいかにそやまた人のありさまよくみさためぬほとはわつらはし
かるへしさりとてしらてあらんはたいとくちおしかるへけれはいかにせましと
おほしわつらひてつく　くとなかめふし給へりひめ君いかにつれ　くならんひ
ころになれはくしてやあらむとらうたくおほしやるかのしるしのあふきはさく
らかさねにてこきかたにかすめる月をかきて水にうつしたる心はへめなれたる
事なれとゆへなつかしうもてならしたりくさのはらをはといひしさまのみ心に
かゝり給へは

世にしらぬ心ちこそすれ有明の月のゆくゑをそらにまかへてとかきつけ給
ひてをき給へりおほいとのにもひさしうなりにけるとおほせとわか君も心くる
しけれはこしらへむとおほして二条院へおはしぬみるまゝにいとうつくしけに
おひなりてあいきやうつきらう　くしき心はえいとことなりあかぬ所なうわか
御心のまゝにをしへなさんとおほすにかなひぬへしおとこの御をしへなれはす
こし人なれたる事やましらむとおもふこそうしろめたけれ日ころの御ものかた
り御ことなとをしへくらしていて給ふをれいのとくちおしうおほせといまはい
とようならはされてわりなくはしたひまつはさすおほいとのにはれいのふとも
たいめんしたまはすつれ　くとよろつおほしめくらされてさうの御ことまさく
りてやはらかにぬる夜はなくてとうたひ給おとゝわたり給ひて一日のけふあり
し事きこえ給ふこゝらのよはひにてめいわうの御代四代をなんみ侍ぬれとこの

たひのやうにふみともきやうさくにまひかくものゝねともととのほりてよはひのふる事なむ侍らさりつる道　くのものの上手ともおほかるころをひくはしうしろしめしとゝのへさせ給へるけなりおきなもほとほとまひいてぬへき心ちなんし侍しときこえ給へはことにとゝのへおこなふ事も侍らすたゝおほやけ事にそしうなるものゝしともをこゝかしこにたつね侍しなりよろつのことよりは柳花園まことにこうたいのれいともなりぬへくみたまへしにましてさかゆくはるにたちいてさせ給へましかは世のめんほくにや侍らましときこえ給ふ弁中将なとまいりあひてかうらむにせなかをしつゝとり　くにもののねともしらへあはせてあそひ給ふいとおもしろしかのありあけの君ははかなかりし夢をおほしいてゝいとものなけかしうなかめ給ふ春宮には卯月はかりとおほしさためたれはいとわりなうおほしみたれたるをおとこもたつね給はむにあとはかなくはあらねといつれともしらてことにゆるし給はぬあたりにかかつらはむも人わるくおもひわつらひ給ふにやよひの廿余日右大殿のゆみのけちにかむたちめみこたちおほくつとへ給てやかてふちの宴し給ふ花さかりはすきにたるをほかのちりなむとやをしへられたりけむをくれてさくさくらふた木そいとおもしろきあたらしうつくり給へる殿を宮たちの御もきの日みかきしつらはれたりはなはなともののし給殿のやうにてなに事もいまめかしうもてなし給へり源氏の君にも一日うちにて御たいめんのついてにきこえ給しかとおはせねはくちおしうものゝはえなしとおほして御この四位の少将をたてまつりたまふ

　わかやとの花しなへての色ならはなにかはさらに君をまたまし内におはするほとにてうへにそうし給ふしたりかほなりやとわらはせ給てわさとあめるをはやうものせよかし女みこたちなともおいいつる所なれはなへてのさまには思ましきをなとの給はす御よそひなとひきつくろひ給ていたうくるゝほとにまれてそわたり給さくらのからのきの御なをしえひそめのしたかさねしりいとなかくひきてみな人はうへのきぬなるにあされたるおほきみすかたのなまめきたるにていつかれいりたまへる御さまけにいとことなり花のにほひもけおされてなか　くことさましになむあそひなといとおもしろうし給て夜すこしふけゆく程に源氏のきみいたくゑいなやめるさまにもてなし給てまきれたち給ひぬしむ殿に女一宮女三宮のおはしますひむかしのとくちにおはしてよりゐたまへりふちはこなたのつまにあたりてあれはみかうしともあけわたして人　くいてゐたりそてくちなとたうかのおりおほえてことさらめきもていてたるをふさはしからすとまつふちつほわたりおほしいてらるなやましきにいといたうしひられて

わひにて侍りかしこけれとこのおまへにこそはかけにもかくさせ給はめとてつまとのみすをひきゝたまへはあなわつらはしよからぬ人こそやむことなきゆかりはかこち侍なれといふけしきをみ給ふにおも　くしうはあらねとをしなへてのわかうとともにはあらすあてにおかしきけはひしるしそらたきものいとけふたうくゆりてきぬのをとなひいとはなやかにふるまひなして心にくゝをくまりたるけはひはたちをくれいまめかしき事をこのみたるわたりにてやむことなき御方　くものみ給とてこのとくちはしめたまへるなるへしさしもあるまし事なれとさすかにおかしうおもほされていつれならむとむねうちつふれてあふきをとられてからきめをみるとうちおほとけたるこゑにいひなしてよりゐたまへりあやしくもさまかへけるこまうとかなといらふるは心しらぬにやあらんいらへはせてたゝとき　くうちなけくけはひするかたによりかゝりてき丁こしに手をとらへて

あつさゆみいるさのやまにまとふ哉ほのみし月のかけやみゆるとなにゆへかとをしあてにのたまふをえしのはぬなるへし

心いるかたならませはゆみはりの月なき空にまよはましやはといふこゑたゝそれなりいとうれしきものから